

巻頭言

公益社団法人 日本放射線技術学会

東北支部支部長 坂本 博

晩秋となる2015年10月31日(土)、11月1日(日)の2日間にわたり、第5回東北放射線医療技術学術大会が山形市で開催されました。大会を成功裡に導いていただいた山田大会長、岡田実行委員長の御尽力に敬意を表すとともに多大なる御支援、御協力をいただいた大会関係者の皆様、大会に参加いただいた会員の皆様に感謝申し上げます。

東北支部では毎年この学術大会に加え、本部の各専門部会共催セミナーと独自の東北支部セミナーも開催しています。本会には県単位の実働組織等は存在しないため、これらの活動の情報発信・共有については支部雑誌やホームページを主体に行ってきました。特にこの雑誌はその年に行われた学術大会の臨場を会員の手元に届ける役目を担い、支部の刊行物として25年の歴史となります。この実績を継承しつつ現在、支部では会員との距離感を縮めるために支部が発信・共有する情報についての新たな方策を検討しています。

情報の共有については、データ、情報、知識、知恵といった共有ピラミッドという考え方(データが最下層で順に上位層)があります*。このピラミッド構造は、我々の医療従事者としての業務や学術活動としての研究、論文作成においてもあてはまるのではないのでしょうか。特にピラミッドの各段階に“気づき”というレイヤーが発生することに同感します。医療の業務、実務における医療情報の共有はチーム医療、地域連携、保健医療管理、国際協力等々と広がっていきませんが、身近なところでは放射線撮影依頼がオーダーシステム上で電子化され、部門システムあるいは電子カルテ内で情報連携していることがわかり易いでしょう。そこには情報が単純に連携されるだけでは不十分であることが見えてきます。また、放射線技術学分野の研究においても、情報の取り扱いにはこれまで以上に倫理に重きが置かれるようになりました。また、改正個人情報保護法の施行により医療における情報の取り扱いも今後変わっていくでしょう。研究も単純にデータを扱えば良いということではないのです。情報の発信・共有には医療情報マネジメント、ナレッジマネジメントの観点から情報を管理する必要性があるのです。

一般的にもインターネット、SNS、クラウドサービスにより世界中から過剰な情報が氾濫し、個人レベルでも自己責任の元に情報の管理が必要な時代になりました。このような時代であるからこそ、東北支部としても情報のあり方、発信・共有の方法を再検討しているのです。医療に携わる我々にとって紙が情報の活用に万能であることはいわずもがなです。しかし、東北部会が東北支部へ名称が変わったように、この万能の情報伝達ツールも進化する時期なのだと考えています。

*参考文献:『「過情報」の整理学』 上野佳恵著 中公選書